
迷路デイ

伊東 光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

迷路デイ

【Nコード】

N0111D

【作者名】

伊東 光

【あらすじ】

謎多き二人の大学生、織田と大神が様々な日常や事件に首を突っ込んでいく物語。

清美編

清美が夜遅く、自宅のマンションのソファの上で、高校生のときにハマった現実では考えられないほどありえない展開だらけの恋愛小説を読み返しているときだった。ふいに携帯電話から無機質なメロディがなった。

「どちらさまでしょうか」分かつてはいるが尋ねてみる。

「織田だよ。君の命の恩人であり、例の件に関して君へ報告義務をもっている織田茂だよ」

織田のその言い方に若干の怒りを覚えた清美は言い返した。

「訂正事項、第一にわたしはアンタに命を救われた記憶はない。

第二に、あの事件のことを誇張して言っているのなら、あのとき救急車を呼んでくれたのはあんたじゃない。第三に…」

「ストップ、ストップ。わかった、俺が悪かった。」

清美が喋ろうとするのさえぎり、ふたたび織田が喋りだした。

「例の件に関してだが、仁は土曜日になら都合がつくそうだ」

織田が、まるでスパイ同士の会話のように声を潜めて言った。

「なるほど、了解した。で、場所と時刻は」

清美が織田の真似をして返すと、

「ははっ、何だよその喋り方は。どうかしたのかよ」

などと織田はいった。

「まあ、そんなことより、土曜朝九時に俺の家に集合な。仁にも言っといてくれ」

「ちょ、ちょっと。何であたしが」

清美の文句が届く前に織田は電話を切った。

「ありえない」

清美はそうつぶやくと、手に持ったままの携帯電話と恋愛小説を交互に見比べながら思う。

そつえば、私たちの出会いはこの恋愛小説以上にありえない展開

開からだつたな、と。

半年前のホワイトクリスマス。清美は同僚の女性社員から誘われた合コンを断り家路に着くところだった。プスツ、という音とともに清美は全身の力が抜けるのを感じた。目の前を全身黒ずくめの人物が立ち去ろうとしている。

清美は、自分が完全に倒れきる前に起きた出来事をコマ送りで見るとように見た。

まず、赤と黄の二色のボールが清美の顔の脇を通り過ぎた。赤のボールは途中で力尽き道路の真ん中に落ちて割れた。黄色のボールも、力尽きたと思つたが黒ずくめの人物の足に当たり破裂した。が、謎の人物は全く動じることなく全力疾走で立ち去った。

清美の前に二人の青年が走り寄つてきた。二人ともまだ大学生くらいかな、と清美は思つた。二人とも痩せ方の長身であり、一人はぼさぼさの黒髪で若干太い眉が特徴的な、カラスのような印象を与える青年だった。もう一人はさらさらな金髪できりりとした瞳を持つ、強いて例えるなら、恥ずかしい言い方だが、天使のようだった。

目が覚めたとき、清美はベッドの上にいた。殺風景かつ清潔すぎる部屋と自分の腕にさされている点滴をみて、ああ、自分は病院にいるのか、と気が付いた。

しばらくぼんやりしていると、ドアが開いて、「お、眼覚めたんだ」と言いながらカラスのようなあの青年が病室に入ってきた。

「よかつたな、医者の話では傷は浅くて傷跡も残らないらしいぞ」と妙になれなれしく続けると、

「俺は、織田茂だ。ちなみに今は果物を買いにいって、いないがもう一人はお前のために救急車を呼んだ英雄、その名も大神仁だ」と、言つた。

「ありがとう。助けてくれて。ところで……」

清美が織田へ問いかけようとしたところで、もう一人の青年「大神仁」が病室へ入ってきた。

「あれ、眼が覚めたんだ。良かった。茂、彼女に自己紹介はしたのかい？」

「ああ、もちろん。お前の分もサービスで言っというてやったよ」

「あの、いいかしら？あなたたちに聞きたいことがあるんだけど」
清美が問いかけると、「かまわないぜ」「もちろん」と二人から返事が返ってくるので、続ける。

「ええと、まず第一に、私にいったい何が起こったの？第二にあなたたちはいったい誰？第三に、あなたたちはあの犯人に何を投げつけたの？最後にそのアンタはどうしてそうなれなれしいのよ」
清美は早口で言いいながら最後に織田のことを指差した。

「うるせー。よくもこう、つぎからつぎに言葉がでてくるよな」

織田が愚痴をこぼしているのを脇で聞きつつ、大神が苦笑しながら答えた。

「すいません、茂は誰に対してもこの調子なんですよ。許してやってください」

「いや、でもよ。実際のところ敬語を使うことはよ、自分を相手より格下な存在と認めることじゃねえかよ」と、織田が言い終わるのを待ってから、大神が話を戻した。

「質問にはまとめて答えさせてもらいまよ」と前置きしてから、

「僕たちはただのしがなない大学二年生ですよ。通りすがりのね。

あなたに起きた事を説明すると、あなたはたぶん、通り魔に刺されたんですよ」

そう言うとお大神は最近清美たちの住む都市で、起こっている連続通り魔の犯行かもしれないですねと、にこやかに答えてから、

「ちなみに、僕らが投げつけたあれは、当たると割れてあたりに特殊な塗料をまきちらすものですよ」と残った問いにも答えると、「リングは好きですか」と尋ねた。

「すみません、茂のヤツ、自分の家の住所も教えなかったみたいで」

「ううん、全然いいのよ」清美は言いながら、隣に立つ大神の姿を観察した。完璧だった。その容姿もさることながら礼儀正しい態度はとても好ましかった。いや、それだけではない。彼から発せられる神々しい魅力というか、オーラというか、とにかくそういった何か大神には確かにあった。

織田からの連絡を受けとほうにくれた清美は、さっそく大神に電話した。すると、大神は織田にすぐさまメールを送り、集合場所を地元では有名な記念碑のある公園に変更させた。

約束した時間の十分前に、清美が記念碑のところへ行くとすでに大神が待っていた。

時間になっても織田が来ないので、清美は大神との会話を再開させた。

「でもよく見つけられたわね。大変だったんじゃないの」と、柄にもなく大神のことを気遣った。

「いえ、僕らが呼びかけるだけで大概のことなら手伝ってくれる友達が大量いるので、二日前の午前中にはこの情報が手に入りましたよ」

「へえ、いい友達に恵まれているのね」適当に返す。

すると、大神は「いえ、ちよつと違うんですよ」とイタズラっぽく笑った。

待ち合わせた時間より七、八分遅れて織田が姿をあらわすと悪びれもせず言った、

「よし、お前ら全員いるな。じゃあ、行くか」

「ちよつと待ちなさいよ。遅れてきてあやまりもしないわけ」

「当たり前だろ、勝手に集会所変えたのはそっちなんだからよ」

清美は助けを請うような眼で大神を見たがあっさりと無視された。

清美が不審者に刺され、病院を退院するまでの三週間。織田と大神の二人は、ほぼ毎日のようになぜか見舞いに来た。その間に清美

は、織田が清美に対して一切の敬語を使わないことに対して文句をつけなくなった。単純にめんどくさいと言うのもあったが、なにより敬語を強要すると自分が彼らよりも人生において先輩であることを思い出してしまいそうだったからだ。清美は、同級生のように二人と話せることがうれしかった。

清美が医者から、あと一週間後には無事退院できますよ、と聞かされた翌日の午後だった。

「なあなあ、仕返ししてやりたいとか思わないのかよ」と織田から持ちかけられた。

「何に對してよ」

清美が尋ねると、

「通り魔だよ。ヤツに借りを返してやろうぜ」

「そんなこと、警察に任しておけばいいのよ」

「十年前から数えて八千六百件」

いきなり大神が口をはさんだ。

「なんのこと？」

「この都市で起こった未解決の事件の数だよ」

「うそ…」嘘でしょ、と頭の中に鳴り響く。それでも、法治国家なのかよ、と思う。

「警察つてのはよ、見つけることと解決することが苦手な上に、誤魔化すことが大得意なんだよな」と、織田が言う。

「だからさ、この際犯人探しは俺らでやろうぜ。絶対みつけてやるよ」

と、いうわけで清美たち三人はその犯人のもとへ行つて出頭するように諭すつもりだった。

犯人の家へは、バスで行くんだ、と大神は言った。割とすいているバスの中で清美は二人に聞いた。

「どうして今から行くアパートの住人が犯人だって分かるわけ」

「んなことも分からないのかよ。においだよ、におい。罪を隠し

ている人間独特のにおいをかいで断定したんだよ」などと織田は言った。

「大神君、本当はどうやったの？」

「特殊な塗料を使ったカラーボールを犯人の脚あたりに当てたでしょう。あの塗料が付着した衣服を探させたんですよ」

「そんなことが出来るわけなの？」

無理だ、と清美は思った。広いこの都市からどうやってたら塗料付きの衣服など探し当てられるというのだ。だいたいにして、犯人も馬鹿ではあるまい。塗料の付いた衣服など洗うか、さもなければ捨てるはずだ、少なくとも私ならそうする。

と、いった趣旨を大神に伝えた。

「特殊な、と言ったでしょう。あの塗料は時間がたつと消えて、上から特殊な光りを当てないと見れなくなるんだ。それに、特殊な水溶液を使わないと落とすことも出来ない」

「ふーん。また、ずいぶんと特殊づくしなのね」

「ところで、あの時犯人にそのボールを当てたのは、どっちだったの？」

「ああ、それは僕のほうだよ」と大神が誇らしげに言った。

「ああ、俺は外れたほうだよ」と織田が悲しげに言った。

その後くだらない雑談話に花を咲かせながら、気が付くとバスは終点に到着していた。

「ここからどうするの？」

清美が尋ねると「確か、こっちの方向だよ」と大神が歩き出し、つられて織田と清美は付いていった。

フツのアパートだった。寂れて老朽化しているわけでもなく、まさしく悪の巣窟、といった感じでもない。悪く言えば平凡、良く言っても平凡。ただただ、フツだった。

二階へあがり織田が一室のチャイムを鳴らした。チャイムの音も

平凡。ただ、なかなか人が出てこなかった。

「もしもし、誰かいるのかー」

織田がしつこいくらいにチャイムを鳴らす。が、応答なし。

「あんたたちも記者なのかい」

三人が横を向くと初老の人のよさそうな男が立っていた。

男は亀井と名乗りこのアパートの管理人だと明かした。

「あの…。お茶まで出して頂いて、かえってどうもすみません」

三人は亀井に招かれアパートの一階にある亀井の自室にいた。清美が謝ると、亀井が、

「いえ、こちらこそ。こんなのしか出せなくて」

とさらに謝り返した。

「そんなことよりも、これは一体全体どういうことなんだよ」

織田がわめき散らす。

管理人の亀井からはいくつかの話が聞けた。二日前の深夜、織田がチャイムを押し続けた部屋に住む中里という男が、警察により傷害の現行犯で捕まったこと。取調べによりその男が三人の住んでいる都市に出没していた通り魔である可能性が高いこと。その結果昨日には数多くの報道関係者がこのアパートを訪れたこと。したがって亀井が、しつこくチャイムを鳴らす織田を見て一日遅れでやってきた報道関係者だとかんちがいしたこと、などなど。

清美はアパートに来た目的を亀井にはあいまいな表現でごまかした。

帰り道、妙にしょぼくれた織田のことが心配で声を掛けた。

「どうかしたの」

「悔しい…」

清美は織田が情けない落ち込んだ声で返してきたのには驚いた。

「何がよ、犯人が捕まって良かったじゃないの」

織田が次に返してくる言葉に清美は啞然とし、脇で二人のやり取りを聞いていた大神はとても愉快的気分になった。

「なんで警察が苦手な分野で俺が負けるんだよー」

解決

太陽編（前書き）

清美編の次の日、織田と大神は新たな暇つぶしを見つける……。。

太陽編

六月、日曜日の喫茶店で一人、推理小説を読んでいるときだった。「陽介くんじゃないか」という声に振り向くと、そこには同じテニスサークルに所属している一年上の先輩である大神が立っていた。ハッと息を呑む。

「どうも、先輩。最近サークルに来ないですけど、どこかしたんですか」

大神はいつの間にか陽介と向かい合うように椅子に腰掛けていた。

「大したことじゃないよ。それにその問題はあっけなく昨日、解決した。いや、三日前かな」と大神がほえみながら喋るのをよそに、陽介は考えていた。

大神はとにかく不思議な男だった。キリリとした瞳、高い鼻、整った顔、痩せ型の長身で染めた金髪が良く似合う。かつこいい、のではなく「美しい」。周りを虜にしまっオーラを持っている。こういう人間こそ人間国宝にふさわしい。いや世界遺産として残すべきだ、と半分本気で思う。

女性からも人気が高いらしく、ファンクラブが結成され、彼のためならなんでもすると豪語する会員もいると聞く。彼がテニスコートに立った日にはあたりを他の野次馬が近寄れないようにしてしまうことがあるほどだった。

ただ、大半の学生が疑問視していることがある。それは、彼が女性と交際しているとの噂が一切ないことだった。同じ学部的女子によると彼の交友関係は極端に狭く、友人として上げられるのは大神と同級生の「織田茂」ただ一人だそうだ。眉唾ものだが、彼女が「大神にファンクラブ」の副会長であることと、彼とサークル内で頻繁に会話するのは自分ぐらいだということに気づき一応信じている。

「ところで陽介くん、今日ひま？」と大神が尋ねてくるので、

「はい、ヒマッすよ」と答えた。実際午後からあるはずだった講

義は、学会の準備とやらで潰れてしまっていた。

「良かった、一緒に来てくれ。君を待っている奴がいるんだ」

そういわれて大神に連れて行かれたのは、駅前にあるファーストフード店の二階だった。

「よう、案外早かったな。もつとかかるかと思ったぜ」

窓から最もはなれた席に座っている男がハンバーガーをほおぼりながら、大声であきらかに大神を呼んできた。

「やあ、食事中なのに悪かったね。」

「気にすんなっての。もともと俺から持ち掛けたんだからよ。そいつがか？」

「ああ、そうだよ。彼が日野陽介くん。陽介くん、こいつは織田茂だ」

大神は確か自分を待っている人がいると言っていたよな、と陽介は考えた。なぜ面識のない織田が自分に会いたがったのだろう。考えられるのは大神が自分のことを織田に喋ったから、だろう。陽介は自分の考えを否定した。友人から話を聞いただけで、その相手呼び出す人間などあまりいないだろう。が、違った。

「いやー仁から話を聞いたときピーンときたぜ。お前に会うべきだったな」

「は？」なんて。

「うんうん、いいねえ。悩んでる男の顔は」

「え？」いったい。

「お前の片思い、俺が成就させてやるよ」

「……………」知っているんだ？

織田が大神から日野陽介の話を聞いたのは昨日の晩、携帯電話からだった。

織田はその日、半年かけてきた計画を失敗していた。自分に責任の一端があるわけでない失敗だった。それゆえに失意の中で希望を

なくしていた。

そんなときだった。大神から電話がきた。最初はシカトしようかとも思ったが気が変わった。理由はなんとなく、だ。

「へこんでるかい」と、大神は尋ねた。

「そんな会があったら、俺は名誉会員だ」

織田が適当に返す。

「俺は今、迷路の中でメロメロになって迷っているんだ」

くだらない洒落が続くな、と大神は思いつつ「迷路かい？」と、聞く。

「いいか、大神。よく聞けよ」

「なんだい？」

「その通り。人生は迷路なんだよ、真っ暗いな。しかも超がつくほどの難題だ。みんな楽しんで最短ルートでゴールしようとしやがる。ただな、どうしたって誰もが何回も行き止まりにぶつかってしまっ
んだよ」

大神は苦笑してしまう。が、織田は気にしない。

「でもな、迷路なんだから行き止まりにぶつかっても引き返せるんだよ。間に合うんだよ…。そうだよ」

と言ったとき織田は黙りこくった。

「茂、大丈夫かい」「……………」「なんなら、いっしょに迷路を進もうか」「……………」「おもしろい話、あるけど」「……………」「少しだが反応があったので大神は日野という後輩の片思いの話を聞かせた。

大神が話終わると織田はさっきまでとは打って変わってテンションがあがっていた。

「仁、ナイスだ。今度はそいつがターゲットだ。明日そいつに合わせてくれ。絶対くつつけてやる。お前の部下共も総動員するぞ。明日が楽しみだ」

「部下って…」

大神は陽介には悪いと思っていなかった。まあ、いいかな。そんな

気分だった。

「…というわけで話した」

大神が言くと、陽介が「そりゃないっしょ」と文句を言った。

「じゃあ俺の恋愛話はそのへこんでいた織田先輩を笑わせるののために使われたんですか」

「ただ笑わせるためじゃない。茂が調子を戻せるように有効利用したんだよ」

「変わりませんよ」

「それにしても、お前は大学生にもなつて恋愛ぐらい一人で出来ないのかよ」

織田に指摘されると、陽介が「ちがうですよ」といった。

「俺が好きになった人の名前、大神さんに教えましたっけ」

「いや、聞いてないけど。誰なの？」

「月山兎さんつきやまうさぎというんですけど…」

陽介が喋るのを遮るかのように織田が声を上げた。

「ほう！それはいい！！お前たち名前の相性はこれ以上ないってくらいバッチリだ。日野陽介と月山兎、太陽と月。両方あるからすばらしい。お前らは間違いなくくつつくぞ、日食や月食のようにな」

「何言ってんですかこの人は」

陽介が大神に尋ねると

「許してやってくれ、茂はこういうやつなんだ」

と、大神は嫌がるのでも友を馬鹿にした眼で見るのでもなく、織田を愛おしそうにみつめた。

「ごめんね陽介君。で、話の続きは？」

「その月山さんに本当は今日、告白するつもりだったんですよ」

と陽介が言くと、大神と織田の二人が同時に口を動かした。

「それはおめでとう」

「それはないだろう」

陽介が、「月山さんは　という居酒屋で働いている」と言つので、

一旦は解散して店の開く午後六時にその店に集合するようにと織田は言った。

陽介が断つても織田は聞く耳を持たず、拳句の果てに大神までノリノリだった。

Each Rest編（前書き）

一旦は解散した三人の向かう先とは……。

Each Rest 編

く月く

開店二時間前、店長や同僚よりも早く来て推理小説を読みながら店内の掃除をする。それが月山にとつてはとても幸福でいられる時間だった。本を読み進めながら、華麗な推理を試みせる探偵のごとく、今日店に訪れる客はどんな客かを憶測と勘だけで構築される推理で脳内を満たすのだ。

く太陽く

偶然だが、陽介と織田はまったく同じ方法で暇をつぶそうとしていた。

「織田先輩、なんでこの映画観ようと思ったんですか」

「なんとなくだよ。大体にして映画を観るのにいちいち理由をつけるヤツなんかいないだろうが。人気があるからなんとなく観にきました、とか監督が好きだからなんとなく観にきました、って感じだろ」

陽介は二人と別れた後、映画館へ向かった。

前々から観たいと思っていた映画のチケットを購入したときだった。後ろから「ほう、お前もその映画を観るのか」と、織田に声をかけられた。どうやら織田も映画を観に来たらしい。

「先輩、さっきの理屈は、なんとなく、ってフレーズをはぶけば立派な理由になると思うんですけど」

陽介がポップコーンを買うために売店の列に混ざりながら言った。織田も陽介の後ろに並びながら、「ところで、この映画はどういう内容なんだ」とたずねる。

映画が始まる前の予告のとき、織田の理不尽な騒々しさに陽介は不安を覚えた。が、実際映画が始まると織田はうそのように真剣な

顔で、じつと映画に観入っていた。

「大神」

「すみません、いきなり訪れて」

「いいわよ。日曜は暇なの。大神君、今日は用事があるって昨日言ってなかったっけ」

と言いながら、キッチンから持ってきた紅茶の入ったティーポッドとカップ二つをテーブルの上に置いた。

「嘘付いちゃいました」

と大神は返す。

大神は清美のマンションへとやって来ていた。織田に内緒で、だ。「ところで、あのうるさいヤツがアンタと一緒にじゃないわね、大丈夫なの？」

清美が心配そうに尋ねてくるので大神は答える。昨日の一件から織田は立ち直ったこと、それは後輩の恋愛話のおかげだと言うこと、実は六時からその後輩が告白をしに行くので待ち合わせをしていること、その間の暇つぶしに織田は映画を見に行ったが自分はその映画に興味がないこと、などなど。

一通り話し終えた後、清美は口を開いた。

「なるほど。そういう言う訳で我が家があるあなたの暇つぶし場所に選ばれたのね」

「違いますよ」と大神はほほえんで返しながら紅茶を口に含んだ。

「実のところ、清美さんに相談があるんですよ」

「なあに？」

「コイツってどんな感じなんですかね」

清美はその質問に呆れた。

「それだけのためにわざわざ来たの。そんなの携帯電話使えば楽じゃない」

そう言いながら、空に向かって指を動かせる。

大神はその答えに呆れた。

「魚の鯉じゃないですよ。恋愛のことですよ。ちなみに、一回も誰とも付き合ったことはありません」

本来なら、自嘲気味に話すべきなのに大神は堂々と言い切った。

「わっ、わかってるわよ」

清美の頬は薄く紅潮した。気を取り直して「でも意外ね」と言う。

「でも意外ね、そんなに格好いいのに。やっぱり天使はそういう世俗的なことに興味がないのかしら」

「天使？何のことです？」

「ううん、なんでもない」

「僕がその後輩に恋愛の相談を受けたときこう思ってたんですよ。

こういうのは茂か清美さんに尋ねるべきだ、とね」

「なるほど、織田に後輩の話をしたのは織田を復活させるためだけじゃなかったのね」

「まあ、そういう訳です」

それから清美は今までの自分の体験談と、適当にでっち上げた恋愛の法則を大神に話して聞かせた。

清美が話し終えた後大神は「なるほど」と言い小さく頷いた。

「参考になったかしら」

「ええ、とても。清美さんは今、誰かと付き合っているんですか」
「わたしの恋愛は四年前で止まっているのよ」

清美は若干げんがりとした顔で答えた。

太陽編く式

く太陽

映画を観終わり織田と陽介は館外で見つけたベンチに腰掛け、それぞれパンフレッドを読んでいるときだった。織田の携帯電話から着信メロディがなる。織田は電話に出ると、「申す、申す。」と奇怪な言動をとる。

「先輩、何言ってますか？」

織田はめんどくさそうにこっちを見て言う。

「あのな、電話に出るとき、もしもっていうだろ。あれはもとも昔電話の交換手がかけてきた相手にこう言ったのが始まりなんだよ。申す申す、かける相手とその後用件は何ですか、ってな」

そう言うとき織田はかけてきた相手に「いやなに、出来の悪い後輩に教え諭していたところだよ」と言った。

その後の織田は「ほう、なんと」や「それはいいじゃないか」などと言うばかりなので陽介は喋っている内容を聞き取ることはできなかった。ただ、最後に「わかったよ、仁」、と織田が言うのでかけてきた相手だけは分かった。

電話を切り、織田が陽介に向かって言う。

「さあ、行こうぜ」

六時になっても大神が来ないので仕方なく陽介は織田と共に居酒屋に入った。

意外と混んでいたが、従業員に後からもう一人来るので、と言いつきに椅子に腰掛ける。織田はすでに何を頼もうかとメニュー表を見ていた。

「生、二つ」

織田が従業員にいうのを聞きながら、月山さんはどこかと目を凝らす。が見当たらない。しばらくキョロキョロしていると、織田が

声をかけてきた。

「お前な、そんなに見ていると店のどっかに穴が開くぞ」

「あ、開くわけないじゃないですか」

陽介が赤面しつつ答えると、

「そんなに気になるなら、従業員に月島って女を呼ばせたらいいじゃないか」

と返された。その言い方には腹が立ったが、それも一理あるな、とも思わなくもない。

「そんな言い方は失礼ですよ」

「うるせえな。んなこと知るかつての」

うるさいのは織田のほうだし、喋りかけてきたくせに知らないとはどういうことだ、と怒鳴りたいのをこらえた。

その後は、従業員の持つてきたビールを二人でちびりちびりとやりながら、大学でのことをお互いに話した。ハゲをづらで隠しているのがバレバレの教授の話なんかもそれなりにおもしろかったし、なによりうるさいとは思っていなかった織田との会話がとても楽しかった。たぶんお酒の影響が関係しているのだろう。

二十分ばかり喋っていると、大神が大人の雰囲気をもし出した女性を一人連れやってきた。なんだ、先輩にも彼女、いるじゃないか。と、大神について語っていたあの女子を馬鹿にした。

「よう、遅かったな。仁、清美。早く座れよ」

「ごめん、茂。悪かったよ」「悪かったわね、遅れて。あら、その子が？」

清美と呼ばれた女性が、陽介に自己紹介をした。

「こんばんわ、わたしが清美よ。ちなみに、こいつらとはちょっとした事件で知り合った、まあ友人のようなものね」

「ど、どうも。日野です」どうやら大神の彼女ではないようだ。

すなわちあの女子の言い分のほうが正しかったようだ。

「あのなんであなたが？」陽介はなるべく失礼にならないように尋ねた。

「え、織田から聞いてないの」

「は、はい」

「ダメじゃないか、茂」そういう大神の声には織田をとがめる響きはない。

「だってよ。教えてたらちつともおもしろくないじゃないか」織田に反省の色はなかった。

「おもしろくなくていいのよ」そういう清美はヤレヤレといった感じで首を横に振った。

陽介は一人だけ疎外感を感じたので三人に向って言う。

「ところで、月山さんはどこにいるんでしょうね」

「そういえばまだ見つけてないよな、お前の彼女」

「まだ決まったわけじゃないんですから」

そう言うのと「大船に乗ったつもりでいる。この俺がいるから大丈夫だ」と、織田は言う。かなり小さい泥舟に乗った気分だ。

「なんだ、まだだったの」

「ええ、まあ。いったい、どこにいるのやら」

そう言ったとき、お盆を両の手に乗せて通路を歩く月山の姿を見た。混んでいたから見つけられなかったのではと、三人に言うのと、「ほう、あれが」、「陽介くん、なかなか可愛いらしい子じゃないか」、「あら、本当」と、思い思いの感想を言われた。

しかし、その後三十分ぐらいたっても彼女がこちら側に来ないのに、腹を立てて織田は食事する場所での発言としては考えられないことを言った。

「ああ、もうじれったい。ちょっとウンコに行ってくるわ」

そう言い残して織田は席を立った。

織田がいなくなつてからすぐに清美が喋りかけてきた。

「そういえば、陽介君は織田と映画を観に行ったのよね。何を観たの？」

「一緒に観に行ったわけじゃないんですけど」と陽介は苦笑なが

ら、観た映画のタイトルを伝えた。

「『ポリス・ラビリンス』ですよ。新米警官とベテラン警官もののヤツ」

と陽介が言ったところで、大神が声を上げた。

「えー！茂がその映画を観たのかい」

「はい。それがどうかしたんですか？」

「いや別に……」

大神が言いよんだところで清美が言った。

「そういえば、あいつって警察のことが嫌いなのかも」

「えっ？」

陽介が話の全貌を捉えられずにいると大神は「実はね……」と話し始めた。

「実は、茂の父親は警察官だったんだよ」

「へー。そうだったの」

「もしかして、父親への反抗心で警察が嫌いになった、とかですか」

織田のことならありえなくもない。だが、大神の口調からもっともつとずっと深刻なことなのではないのかとも思う。

「四年前に起きた警察官殺傷事件のことを知っているかい」

もちろん知っていた。いや、覚えていた。あれはなかなか印象強い事件だった。

四年前、陽介がまだ高校生活を満喫しているときにその事件は起こった。

当時、陽介たちが住む街ではかなり悪質な押し込み強盗が頻繁に起こっていた……。

太陽編く式く（後書き）

早めに次の章へ進もうと思っていたのにまた延長してしまう結果になり、申し訳ありません。

これからもどんどんと、書いていこうと思うのでよろしく願います。

名探偵織田茂の華麗なる推理（プロローグ）（前書き）

前話の回想シーンからは飛びますが、ご容赦ください。

名探偵織田茂の華麗なる推理「プロローグ」

月曜の朝早くから大神恢かいは朝食もとらずに、自宅の書斎で医療関係の論文に眼を通しているところだった。

一階の、それも恐らくは玄関口から妻の天子てんこが自分を呼ぶ声が聞こえた。

「どうかしたのか」

ドアを半開きにさせて尋ねると、二十年以上聞いてきた声が聞こえた。

「お邪魔します、天子さん。兄貴のヤツ、また書斎にこもってるんですね」

ああ、間違いない。あの声の持ち主こそ我が親愛なる弟君おとうこきみ、大神仁その人だろう。面倒くさい。

「すいません、こいつべろんべろんに酔ってるみたいで」

「ウィーウ」

「あら、茂君じゃないの」

なんてことだ、あいつもいつしよにいるのか。

「よかつたら二人とも私たちと一緒に朝ごはん、食べない？」

やめてくれ、天子よ。

「はい、喜んで」

終わった……。

「はい、茂君お水」

「ど、ども」

茂が天子から受け取った水を飲み干すのを待ってから、恢は仁と茂に尋ねた。

「で、なんでだ」

「兄貴の問いかけは昔から抽象的過ぎるよ」

「モのぐおとは、ぐていタキにだ」

恐らくは「物事は具体的に言うべきだ」と言っているのだろう。面倒くさい。

「なぜ、月曜の朝早くに来たんだ」

若干、苛立ちながら早口で喋ると、はっきりした口調で「何曜ならいいんだよ」と茂が返した。

「はいはい、口論はそこまで。ご飯でも食べて落ち着いて」

天子がそういいながら、テーブルの上に四人分の箸とご飯茶碗、そしてベーコンエッグと器に移した納豆を置いた。

四人で食事を始めてから数分後、再び恢は尋ねた。

「何の用でうちに来たんだ」

仁がベーコンをほう張りながら答える。

「あのさ、昨日からちよつと飲みすぎちゃってて」

仁の話によると、昨日から知り合いの女性一名と二人の後輩一名、計四人で某居酒屋で朝まで飲んでいたらしい。最初はその後輩が居酒屋の女性従業員に告白するつもりで店に行ったのだが、決心が付く前に当の本人および茂が酔いつぶれてしまい結局どうすることも出来なかった。そうして仕方がないから、後輩と知り合いの女性をそれぞれタクシーに乗せて家に帰り、自分たち二人はこの家に来た。「納得出来ないな。それでは明確な説明になっていない」

「いいじゃない、別に。そんなこと言われても、政治家たちでさえ答えられないようなことをこの子達が答えられるわけないじゃないの」

いつも天子の言うことは正しい。

「なんとなく、でしょ仁君」

「ええ、まあ」

「じゃあ、そのなんとなくのついでに、私に協力してね」

名探偵織田茂の華麗なる推理―齒車島編―

「僕はね、こう見えても饅頭が怖いんだ」

えー、本当ですかと言いながら、現実こんなことを言う人がいるんだと関心してしまった。

ただ、かつこいい人が言うത്それはそれで様になるな、とも思う。カラスだったらうるさいだけだ。日本語を喋るカラス、と思うとこれはこれで楽しいけど、どうなのかな？

商店街の福引きで四泊五日沖縄旅行が当たったときは驚いた。ただただ、驚いた。周りもビックリ、私もビックリ。たぶん、死んだお婆ちゃんもビックリしただろうな、考えすぎかな。

それから二週間後、仕事の休みもとれたので飛行機で那覇空港まで飛んだ。それから、フェリーで齒車島へ向かう。初めて聞いた島の名前だったけれど、やっぱり初めての沖縄旅行だったから私はウキウキしていた、大人げも無く。

そのフェリーで乗り合わせたのが、大神仁と織田茂だった。二人とも大学生だと言う。大神さんは、神秘的な顔立ちだった。時代が時代なら、神様のお告げか何かを聞いて宗教を開いて、この時代にはすっかり四大宗教の一つに数えられていたことだろう。考えすぎだし馬鹿らしいなど、口に出してもいないのに赤面してしまう。織田さんは、良く言えばジェントルマンなカラス、だと思う。ごみをあさる事は絶対に無いけど、騒がしい。でも、耳障りじゃない。でも、やっぱりうるさい。これじゃあ、ジェントルマンでもなんでもないなど、思い直す。本分を忘れた、ただのカラスだ。

船内で出会ったきつかけは、ちよつと恥ずかしくてあんまり言いたくない。黙秘権を行使する。

二人は、私とは違って、旅行代理店でこの旅行をセレクトしたら

しい。何でこんな、って失礼な言い方だけど、無名な島の旅行を選んだのか気になった。けど、深く聞く気は無かった。けど、織田さんが語り始めた。やっぱりうるさいカラスだな、と自分の顔がほころぶのを感じつつ、思ってしまう。本当に、不思議な人達だな。

名探偵織田茂の華麗なる推理―齒車島編―（後書き）

更新が非常に遅くなって本当にごめんなさい。前話から話が飛んでいます、これは意図しておこなわれたことです。大神と織田のお話はまだまだ続きます。大神恢や、妻の天子も次回出てくる予定です、はい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0111d/>

迷路デイ

2010年10月9日14時14分発行